



episode 14 ねえねえ、聞いて。

投稿者 浅井 智子 さま(埼玉県)

『旅の絵本Ⅲ』
安野光雅 作
福音館書店 1981年



彼女は「おはよう」より先に、「ねえねえ、聞いて」が毎朝の挨拶だった。私たちが通っていたのは帰国子女ばかりの中高一貫校、当時は生徒が少なく一学年1クラス30人もいなかった。このアットホームな学校に、中2でオーストラリアから編入した私が仲良くなったのが、イギリスで幼少期を過ごした彼女だった。

おしゃべりが好きで、修学旅行やスキー合宿に行っても「ねえ、まだ起きてる？」と、いつも寝るのは一番最後。「眠たかったら寝たら？」と言うと、「だって、寝ちゃってからみんなが楽しい話をして盛り上がっていたら嫌なもの」と、いつも言っていた。

おしゃべりが大好きで流行に敏感、遊びに行くときも「何を着ていこう？」と、人一倍悩む。絵本や雑貨の新しいお店がオープンすると、よく一緒に出掛けて行った。

そんな彼女が教えてくれたのが、安野光雅さんの『旅の絵本』。特にお気に入りイギリス編で、いろいろなモチーフを見つけるのが楽しかった。イギリス育ちの彼女より多くモチーフを見つけると、「さすが、ともちゃん！」と、大きな目をくりくりして感心してくれた。馬と旅人が様々な国を旅する「ちゃんと次の国につながっているんだよ」、「歴史とか芸術とか勉強しているから、見るとさらに発見がある」と教えてくれた。いつか全シリーズを揃えたいねと話し、「オーストラリア編は歴史が浅いから無理だよ」と、次に出るシリーズを予想してワクワクしながら待っていた。

いつも最後まで起きていた彼女は、若くして乳がんを患い、友人の中で一番最初に眠りについてしまった。スペイン編もデンマーク編も、亡くなって10年後に日本編が出たことも知らずに。「ねえねえ、聞いて。安野さんもそっちに行っちゃったよ。『旅の絵本』大好きだったって伝えてね」。

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2021」投稿作品より



本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



「絵を読む芸術」をみなさまと

1968年に『ふしぎなえ』（福音館書店）で絵本作家デビューを果たした安野光雅氏は、その後、日本における文字のない絵本の中心人物となりました。1971年には『ふしぎなさーかす』、1977年4月に『旅の絵本』、同年10月には「こどものとも」で『もりのえほん』を発表するのです。

なかでも、『旅の絵本』は1977年の1巻から2018年の9巻まで、実に40年にわたって刊行された安野氏の代表作で、ライフワークとも言える作品です。ひとりの旅人が世界の国々を舟で訪れ、その国の町や村、田園やお祭りを散策して各国の文化、歴史に出会い、最後はまた舟に乗って立ち去る、旅の物語です。

文字はないのですが、緻密なイラストの端々から、メッセージが聞こえてくるのです。とりわけ、芸術的な絵画のなかに発見を得た読者は思わず声を発してしまうのです。「絵を読む芸術」、これが安野作品でしょう。



言葉とは別の形で感じる、考える

安野光雅氏が日本において、文字のない絵本の第一人者となる後押しをしたのは、当時、福音館書店の編集長で、のちに社長となる松居直氏です。松居氏は安野氏だけでなく、堀内誠一氏や長新太氏など数々の絵本作家を発掘した敏腕編集者です。

松居氏に絵本を描いてみないかと誘われた安野氏でしたが、「描いてもいいけど、お話しかなきゃいけないんですよ」と答えます。すると、「話なんかなくてもいいですよ」と返してきた松居氏の言葉に、「こいつは面白そうだ」と思い、生まれたのが『ふしぎなえ』というわけです。

『旅の絵本』出版時、評論家に「文章がついていないからわからない」と評され、「この人たちは美術館で絵画をみるとき、どうしているのだろう」と思った経験を福音館書店の月刊誌「母の友」の取材で語っています。そして、「言葉で自然の事象をすべて説明できるわけではない。万能じゃないんだ。一方、絵や絵

本は、言葉とは別の形での考え方と感じ方を提供できると思う」と述べているのです。

感じること、考えることは、人間に与えられた幸福に生きる力で、その力を存分に活用した人間は生涯にわたって豊かに発達できるのです。



遊び心にあふれた安野氏の魂がここに

絵が物語る『旅の絵本Ⅸ』スイス編が出版されると、次に旅する国の予測と希望に夢が広がったのですが、2020年12月に他界されてしまい、その話題もなくなりました。続編への期待もすっかりなくなったころ、私たちは度肝を抜かれたのです。それは、2022年1月10日に登場した『旅の絵本Ⅹ』によるものです。どこまでも遊び心にあふれた安野氏は、下界の驚きぶりをみて、にんまりされたことでしょう。

最終巻の旅先はオランダで、旅人が降り立ったのはアムステルダムです。コロナ禍で窮屈な思いをしている私たちに、極上の娯楽と旅人気分の贈り物くれた安野氏に感謝と敬意を深めました。

安野氏は9巻を出版の後、オランダ編の原画を数枚、編集者に見せた段階で体調を崩され、帰らぬ人となったのですが、生前に描きあげていた原画がアトリエで見つかり、安野氏の計画どおり、『旅の絵本』は10巻完結したのです。『旅の絵本』の醍醐味は旅人目線で旅をするのではなく、旅人を含めた各国の地を俯瞰してみるロードショーになっているところですが、なかでも一番の楽しみは、その国や土地にゆかりある偉人・有名人や、昔話・童話の世界、そして名画までもが至るところに描かれている安野ギャラリーです。

絵本作家生活半世紀の間に、日本が誇れる美しい絵本を後世に残した安野光雅氏、安野ファンは世紀を越えて繁殖することでしょう。

文献

- 1) 山本美希：安野光雅の文字のない絵本，ユリイカ 53(7)，pp.353-360，2021.
- 2) 「母の友」編集部 編：絵本作家のアトリエ (7) 安野光雅さん，母の友，509，pp.10-18，2006.